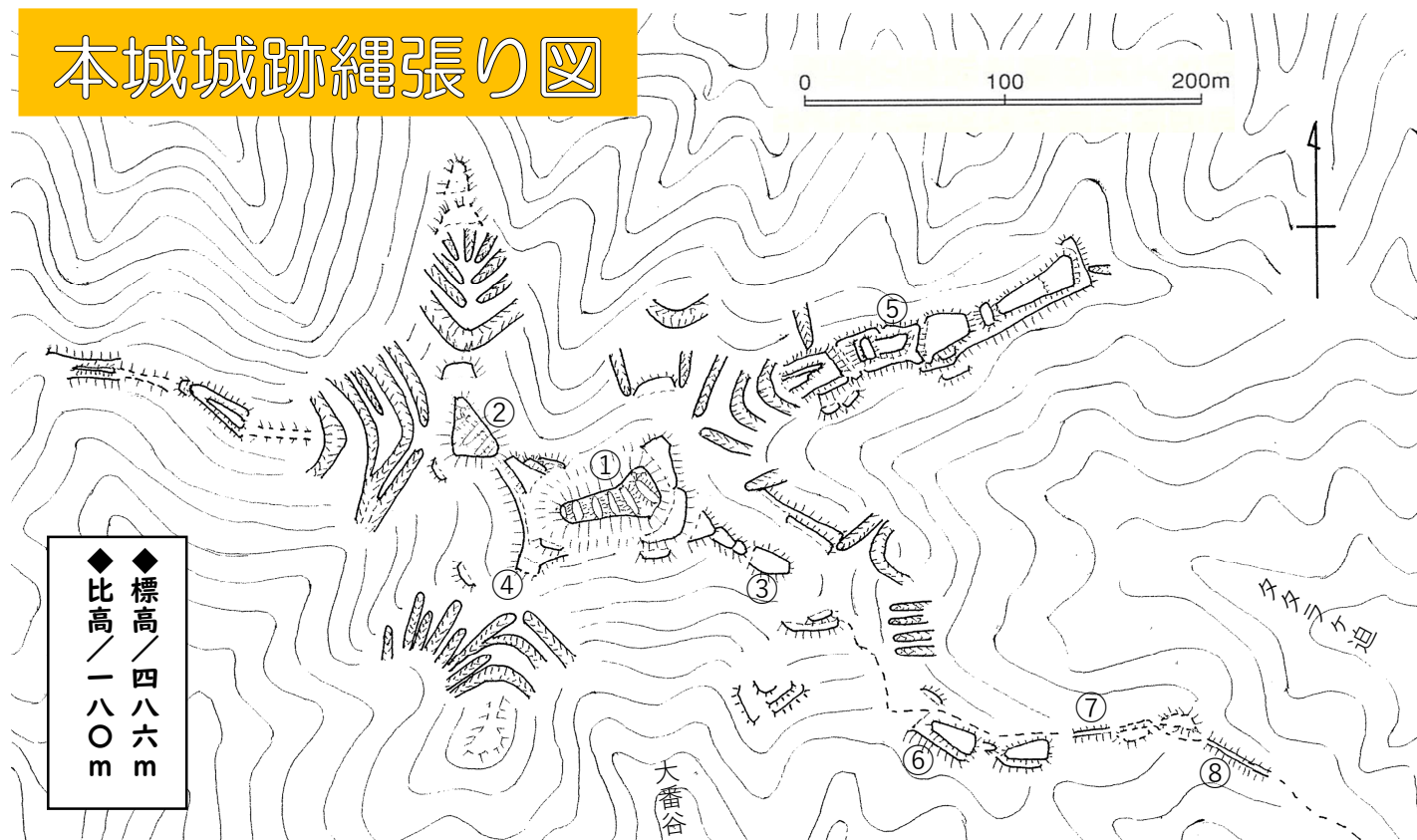


本城城跡縄張り図



出羽郷と本城・本城常光

文和2年(1353) 君谷氏(後の出羽氏)に出羽郷が宛てがわれる。この頃高橋氏が阿須那に往来する。

正平16年(1361)高橋氏は出羽氏を攻め出羽郷を横領する。

明德3年(1392) 南北朝の和睦。大内義弘の調停により出羽郷700貫の内250貫を出羽氏に返還。

室町時代(1400年代)高橋氏は出羽郷支配の拠点として本城築城。高橋氏の一族が居城する。
後に本城氏を名乗る。

享禄3年(1530) 毛利元就の攻略により、高橋氏が滅亡する。本城氏は飛領である出雲須佐高櫓城に拠点を移し尼子氏に属す。

弘治～永禄(1557頃)本城常光は小笠原氏の援軍として邑智郡に着陣し毛利軍と戦う。

永禄初年頃(1560頃)本城常光は石見銀山山吹城の城番を命じられ、銀山を奪おうとする毛利軍と各地で戦う。

永禄5年(1562) 本城常光は毛利方に移り石見銀山は元就が領する。11月本城常光は毛利より謀殺される。



問い合わせ先

田所をどがあずしょう会

詳しくは田所公民館にお問合せください

田所公民館

邑智郡邑南町下田所282番地1

0855-83-0518

道の駅 瑞穂

邑智郡邑南町下田所260番地3

0855-83-1112

本城について

【地理】

江の川の支流出羽川の上流域に開けた出羽盆地を見下ろす絶好の位置を占め、瑞芽峠を挟んで二ツ山城と対峙する。ここは安芸国と国境を接しており、陰陽を結ぶ交通の要衝でもある。

出羽盆地は山がちな石見の中では比較的開けた水田地帯であり、古くから製鉄業の盛んな地域として知られる。特にこの地方で生産される和鋼は良質の鋼として知られていた。この地域では中世の製鉄遺跡も多数知られており、この地域の中世国人領主の経済を支えていた産業の一つと考えられている。

また十六世紀の中頃には毛利元就により久喜銀山の開発も本格的に始められたと考えられており、経済的に極めて重要な地域であった。

【城史】

文和二年(一三五三)阿須那に來住した高橋師光はやがて宮方に転向し、延文六年(一三六二)出羽氏を攻め出羽郷を手に入れた。この戦いで出羽実祐は討ち死にしている。本城は出羽郷を手に入れた高橋氏が、出羽郷支配の拠点として築いたと伝えられている。

出羽郷を逐われた出羽氏はその後何度も失地の回復に努めているが成功しなかった。明德三年(一三九二)南北朝が統一されると、石見守護大内義弘の調停により出羽郷七百貫の内二百五十貫が出羽氏に戻され、以後出羽氏は宇山(邑南町上原)に住むこととなった。

文明八年(一四七六)の高橋命千代の契状には「同名被官者共」として上出羽光教が署名しており、このときは上出羽光教が在城していたことが知られる。

高橋氏やその系譜につながる本城氏については、その系図に不明な点が多いが、命千代の父とされる久光・その跡を継いだ清光・後に高橋家を継承した興光の父重光は、いずれも後年には本城氏を名乗り、あるいは本城に移居したとされている。このことから高橋氏の場合は後継者に家督を譲った当主は本城に移り、後継者を補佐することとなっていたのではなからうか。高橋氏にかかわる城は多数知られているが、その中でも特に堅固に普請されていることから特別な城という意識があったと思われる。

また後に石見銀山の争奪で活躍する本城常光はこの城で生まれ育ったといわれている。
享祿三年(一五三〇)高橋氏が滅んだ後本城がどうなったのかは不明であるが、享祿四年には出羽氏は出羽郷七百貫すべてを回復しており、その後しばらくは出羽氏が使用した後、二ツ山城に移ったものと思われる。



イメージキャラクター
つねみつくん

【城の構造】

本来の登城路は旧田所公園からであり比較的なだらかな道が続いている。やがて尾根筋を削り込んでつくられた土橋⑦⑧がみられ、その正面には郭群⑥が待ち構えている。その郭群の脇を抜けると急斜面となる。ここは谷筋からの侵入には堀切と堅堀で備えている。急斜面を上ると主郭部であるが、③の郭群の普請はやや甘いつくりとなっている。

主郭①は大きな畝状になっており平坦面は見られない。郭②も畝状になっている。これは後世の破城の痕跡である。郭②の北と西の尾根筋は大規模な畝状空堀群と連続堅堀で切断され敵の侵入を防いでいる。郭④の尾根筋と谷筋も大規模な連続堀切と畝状空堀群で切断され敵の侵入を防いでいる。

主郭東下方の比較的なだらかな尾根筋にはかなり広い郭群⑤が続いている。三本の堀切で切られていることからある時期に捨て郭とされた可能性があるが、ここに居住地があったとの伝承もある。

【城の特徴】

この城の最大の見所は、主郭部の大規模な破城にある。戦国期の土の城を破壊した例はこの地域ではほとんどみられないが、全国的にはいくつか知られている。しかしここまで大規模に破壊されている例はあまりみられない。

この破城については次のように考えられる。永祿年間に毛利元就は六男元俱を出羽氏の養子としている。このとき隣接する二ツ山城を自分の息子の居城にふさわしい城として大規模な改修を施し、本城を徹底的に破壊したのではなからうか。本城の破城をよく観察すると、城下から破城がよく見えるように意識しているように見える。ここに元就の強い意志が感じられるのである。

本城のいまひとつの見所は、その徹底した防衛意識にある。その主郭部を見ると特別規模の大きい城ではないものの、主郭部周囲の尾根筋はすべて大規模な連続堀切と畝状空堀群で敵の侵入を防いでおり、主郭部は絶対を守るという強い意志が感じられる。高橋氏に関係すると伝えられる山城の中でこれほどの普請を行っている例は知られておらず、高橋氏の中で極めて重要な意味を持つ城であったと考えられる。